寄　稿

ヒマラヤには行ったのか？

ガラパゴス諸島の中心で，地球貢献をさけぶ

細淵勇人 [1,2]

[1] 秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科

[2] 愛知工業大学工学部建築学科

筆者は，平成 22 年 4 月 1 日から平成 29 年 3 月 31 日までの 7 年間，秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科環境計画学グループの助教として，秋田県由利本荘市で研究・教育活動に勤しんだ．波長別日射量，紫外域日射量の観測・分析やモデル化，天空放射輝度分布に関する検討など，建築気象分野の研究を中心に行い，これらに加え，地元企業との共同研究として，上記研究成果を用いた，新建材の性能評価，壁体の改修工法に関する熱性能の検討などを行った．研究，教育活動の傍ら，秋田で出会った研究者仲間との議論を通して「研究者としての地域貢献」とは如何なるものかについて考える機会を得た．教員採用の過程で考えていた「地域貢献」であるヒマラヤ行きはかなわなかったものの，それに匹敵する「問い」を得る機会となった 7 年間であった．このような機会を得るにあたり，秋田県立大学在職時，「地域貢献」に留まらず研究や，研究者のあるべき姿について議論させていただいた秋田の研究者の方々に心より感謝したい．

キーワード： 秋田，秋田紀行，ヒマラヤ，ガラパゴス，地域貢献，地球貢献

筆者は，平成 22 年 4 月 1 日から平成 29 年 3 月 31 日の 7 年間，秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科助教として，秋田県由利本荘市で研究・教育活動を行いました．

研究は，波長別日射量，紫外域日射量の観測・分析やモデル化，天空放射輝度分布に関する検討など，建築気象に関するものが中心でしたが，これらに加え，地元企業との共同研究として，上記研究成果を用いた，新建材の性能評価，壁体の改修工法に関する熱性能の検討などを行いました．

7 年間お世話になった秋田県立大学を退職し，遠く東海の地で研究活動をスタートし，時には秋田の雪や本荘の風を懐かしく思い出しながらも，ようやく愛知にも慣れたかなと感じられるようになってきた折，ウェブジャーナル編集委員長の谷口教授より，「ウェブジャーナル（地域貢献部門）退職教員の寄稿」執筆の機会をいただきました．

本稿では，筆者の「秋田の思い出」を振り返りながら，秋田時代に「地域貢献」について考えたことについて触れたいと思います．

そのはじまり

その夏，京都は暑かった．

「暑い」と言うと，単純に気温高いのね，盆地だからね，と思われるかもしれないが，その夏は日差しが特に強かったのを覚えている．

学位取得後も博士研究員として，研究室に引き続き在籍していたものの，単年度の研究員．次年度からの所属を探して教員公募サイトをチェックするものの，専門分野の公募は「無い」に等しい，大学教員になるには冬の時代．異国での半年間の研究滞在の出発が迫っていたこともあり，

「話のあった市内の私大の非常勤講師しながら，ひ

責任著者連絡先：細淵勇人　〒470-0392 愛知県豊田市八草町八千草 1247　愛知工業大学工学部建築学科．E-mail: hhos@aitech.ac.jp

とまず，研究進めていこうかね，来年は…」と思ったりしていた，そんなある日，JREC-IN[1] で，専門分野ぴったりの教員公募を見つけた．それが秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科の助教（建築環境工学分野）公募だった．

締め切りに間に合わせる為，京都駅前の本局まで書類を発送しに行き，右京区の家に帰る途中，

「決まるといーね」

「秋田県立大の教員は東北大出身の人ばかりだから，東北大の人で決まってるのかもね．でも面接呼ばれないかな～」から始まって，

「秋田って寒いのかな. 京都よりは暑くないよね？」

「釣りやろうかね, イワナ釣りとか, 秋田行ったら.

釣りキチ三平[2]だし，秋田.」と，宝くじ買って当たる前から使い道夢想するような，そんな会話を，五条七本松のスタバで，入籍したばかりの配偶者としたのは二日前の晩.

その日もいつも通り,「走る哲学者」マルコ・パンターニ[3]よろしく丸坊主で，山の上の大学まで考え事しながらのヒルクライム．夏の研究室の午前中の定番は，上半身裸下半身スポーツ系半ズボン．スポーツ推薦で入学したわけではないけれど「サッカーやりに大学来てます！　今日も朝練でした！」という感じ．ムサい男が上半身裸＋半ズボンでマウスくりくりキーボードかたかたやっている．そんなところに，見慣れない番号から着信.

0184-××××-××××

何かのセールスか？　不審に思いつつ出てみたら，

学科面接のご案内.

個人的には話したことないけれど，学会等で面識のある,「研究者」と認識している先生.

緊張の通話.

首筋，胸，背中を汗がポロポロ流れて落ちてゆく．でも，話した感じだと，

ちょっと好感触？　けっこう好感触！

緊張の通話終わるや興奮状態で,「来年から秋田行くことになりそう」(まだ面接のご案内の段階なのにねw）と，今は亡き父親，続いて，仕事中の配偶者に，研究室から渡り廊下出たところ，遥か向こうに京都タワー望みながら電話して，配偶者の「とりあえず，夜帰宅してから聞くから」に電話切ったところで，相変わらず上半身裸，加えて裸足のすね毛まで汗でぬれているのに気づいた.

それが, 僕の秋田の, 僕と秋田のはじまりだった.

秋田紀行

地続きの土地に飛行機で行く

という考えが全く無かったので，東海道新幹線，秋田新幹線と乗り継いで，秋田駅に降り立ったのはほぼ最終．昼過ぎの暑いさなかの京都からは想像できなかった「涼しさ」に，キャリーバックから学科面接用スーツの上着を慌てて取り出している，T シャツ半ズボンの自分はまるっきり異邦人だねと，海外の空港にいるような落ち着かない気もしたが，エレベータ脇（だったか，上だったか）に『**面倒見の良い大学　秋田県立大学**』という看板を見つけ，面接にはるばるやってきたと実感したところで，夕飯まだだったなと思い出し，駅の周りを T シャツ半ズボン＋スーツ（上）で，キャリーバックがらがら歩き回ってみたものの，牛丼，ハンバーガー，ファミレス, いつもおなじみのお手軽なところ見つからず,

ま いっか，とりあえず景気つけときますか？

と，初めての異郷の，いつもおなじみのチェーン居酒屋で一人呑み始め, 体が十分に温まったところで, 秋田駅前ホテルにチェックイン．翌日の面接練習もそこそこに，長旅の疲れかいつの間にか眠りに落ちて，あっという間に緊張の朝がやってきて，窓の外に「ビルが無い！[4]」ことに愕然としながらも，羽越線の道中は，緑の多様さに目を奪われ，博士課程出たばかりの青二才，大学教員の職を何とか得られそう，**夏の青田を抜けてゆく羽越線は希望の街へと続く電車だね**と，小一時間ばかりの興奮と感傷の一人旅．本荘に着いたら着いたで，コンビニやラーメン屋に風除室ついているのに感動しながらの，がらがらテクテク徒歩行は, 羽越線踏切過ぎたあたりから, 高まる緊張，歩く速度増し増しに，初めて秋田県立大学の門（と言うのか共通棟の入り口）くぐったのは，2009 年の 8 月 25 日（火）.

学科面接

「(研究) **発表する時は，5 分に 1 回は笑いを取らなくてはいけない**」
修士時代の指導教員の教え通り，笑い取るところちゃんと入れたパワーポイントで，自己紹介，研究紹介，研究に対する抱負とこなし，地域貢献に対する抱負まできたところで言ったのは，
「**ヒマラヤとか行きたいです**」.
応募，採用面接に当たって一番苦労したのが，実は「地域貢献」.
未知の土地，秋田.
「秋田」と聞いて思いついたのは，「泣ぐ子（ご）はいねが〜！」の🦁（ナマハゲ）と，子供の時に大好きだった，「ウッヒョ〜〜！！」の「釣りキチ三平」くらい．どんな土地かもわからずに，どう貢献したらよいのかわからない．そんな時に，秋田県立大学の HP を見てみたら目に飛び込んできたのが，
「**ヒマラヤプロジェクト**」.
ネパールの村に太陽光発電システムを設置する，と．博士課程時代に，研究室のネパール人留学生がネパールの住環境に関する研究をしていたのがちょっと楽しそうで，いつか僕も連れて行ってくださいよと話していたこと思い出し，これは楽しそうだねと．そこで決めた，
これで行こう！
「大学の HP もちゃんと見てますね〜」とも思われそうだし，これ良いんじゃないか！　太陽光発電だから，自分のやっている気象関連の研究とも関係あるし．実際にネパール行けちゃったりしたら楽しいだろうな，たぶん！　と考えた．
秋田県，由利本荘市への地域貢献と言うよりは，そんな安易で不純な理由で，
「ヒマラヤプロジェクトなど，まずは，秋田県立大学で行われている既存の地域貢献に，参加させていただければと考えています」といった感じで地域貢献の抱負をまとめたように記憶している．
今思えば，「地域貢献」というよりは「国際協力」だったね，ヒマラヤ．

「お疲れ様でーす」

呑み行けば学生に，スーパー行けば学生に，コンビニ行けば学生に出会ってしまう．出会う学生皆，
「**お疲れ様でーす**」.
学内で会った時と同じ挨拶. 疑い持たない快活さで.
町中で「お疲れ様」は変なので，
「**外で会った時は『こんにちは』**だろ〜」と，ツッコミ入れたりしたけれど，仕事終え，深夜に寄った呑み屋の店先に，昼間研究室で打ち合わせした学生がエプロンつけて「お疲れ様っす!」と出てきた時は，家に帰ってきたんだっけ？　研究室戻ったのか？　ここはどこ？　自分は何しに来た？　さすがにゲシュタルト崩壊.
そんな町でした，本荘.

「ガラパゴス[5]」と「地球貢献」

そんな本荘に赴任して，1 年半の単身赴任を良いことに酒呑み生活が始まったわけだが，そんな生活を送るうち，建築環境システム学科の若手同僚はもちろん，他学科の独身若手などとも一緒に呑みに行くようになっていった.
研究者，しかも「若い」「まじめ」な研究者が集まれば，議論，批判，まぁ「楽しい喧嘩」.
そんな「楽しい喧嘩」で覚えているのが，
「**建築分野はガラパゴス化している**」.
他学科の人たちに言わせれば，論文を日本語で書くところに建築分野が「ガラパゴス化」しているのがわかるのだとのこと.
そもそも「建築」は，その建つ「地域性」抜きには成り立たない分野であり，それゆえ，これまでは日本建築学会の論文集への掲載が学問的目標の一つになり得, 日本語での論文執筆が主となっていた（と思う）．近年，東南アジア，中東地域などへの我が国の建設業者の進出が顕著になっているなど，「国際化」に伴って海外発信の必要性が増している，いや，「必要性が増している」と言うよりも「必須となっている」のが現実で，そんなこと，真面目にやっている研究者なら誰でもわかっている．遅まきながら学会論文集の英語化も検討・試行されている.

「建築分野はガラパゴス化している」への反論として,「グローバルでローカルな，ローカルでグローバルな,それが「建築」ですっ！」(都合良すぎるか？).「建築」における「地域性」の大きさ主張してみたつもりであったものの，まぁ，周りから見たら，少し離れたところから見たら，ガラパゴスのイグアナ？　あるいはゾウガメ？　固有種だったのかもしれない，僕.

「建築分野はガラパゴス化している」とともに覚えているのが,

「**地域貢献じゃなくて，地球貢献なの，研究者が，研究を通してやらなきゃいけないのは！**」

というもの. 危険なのは,「**地域**のニーズ」を追うようになると，研究の本来目指すべき「一般性」とか「普遍性」を見落としてしまうようになってしまわないか？　とのこと.

「地域貢献」というと,「地域のニーズ」を考えて，その「地域のニーズ」に応えることで，地域の人たちの生活向上（端的に言うと経済的向上か？）に尽力することかねと頭の中だけでぼんやりと曖昧に考えてもいたが，そんな言葉を耳にしてから，考えれば考えるほど，この「地域のニーズ」,「地域貢献」って，研究者にとってとても難しいものではないかと考えるようになっていった.

「秋田，由利本荘のニーズ」は,「地域性」を考えれば「特殊解」であり，さらには「特異解」かもしれない可能性もないわけではないわけで…とか，雪の茅舎[6]で溶けかけた脳みそで考えた. 当時は「若い」「まじめ」な（つもりの）研究者だったので,「特異解」かもしれない「特殊解」を求めるような方向性が良いのかどうか,「一般解」の先に,「特殊解」があり，そのまた先に「特異解」があるわけで…とか考えて，訳が分からなくなって,

「**熱燗 2 合　オカワリー**」.

考えれば考えるほど,「研究者として地域にどう貢献するか」と言うのは,「若い」「まじめ」な（つもりの）研究者には本当に難しい問題ではないかと.

「研究室にいるのではなくて，被災地に実際入って行って，被災者の人たちと一緒になって復興に向けた活動がしたいんです」と，東北の震災の後に言っていた教員には,

「それってボランティアとどう違うの？　**研究者として**やることなの？」と, ツッコみ入れたけど（逆ギレというのか, ブチギレられたけれど・・・),「**研究者として**」というところが考えなくてはいけないところではないかと，そんなことばかり考えて答え出ないまま,

「**熱燗 2 合　オカワリー**」….

考え重ねて行き着いた先は,「地域」ではなく「地球」という「一般解」を探すことが，いずれ「地域」貢献につながるのではないかと淡い期待をもって,「特異解」にいつか繋がる「一般解」を探す方が良いのではないか？　それくらい. それくらいしか, 研究者としての自分はできないよ，というある意味の諦念. しかも，そう考えると今度は,「ガラパゴス化している」建築のガラパゴス化した手法で,「一般解」を探せるのか？　ガラパゴス化しているとしても「地球貢献」できるのか？　ということで，またまた訳が分からなくなって,

「**熱燗 2 合　もう一回オカワリー**」….

となってしまうわけで，そんなこんなを頭でっかちに考えているだけで，地域にしろ地球にしろ「貢献」できたことは，全く無いような 7 年間，ただ,「研究者としての（地域）貢献とは？」という「問い」だけ得られたような 7 年間だったが,「貢献」を全く考えていなかったわけじゃない. なので，最後に叫びます，言い訳のように. 恥ずかしいので，ちっちゃな声で,

地球貢献！

本荘は雪降り始めましたか？

これで行こう！の**ヒマラヤ**には行きませんでした. 行けませんでした，結局.

しかしながら，本荘での 7 年間は，自称「若い」「まじめ」な（つもりの）研究者だった僕が，ヒマラヤ行きに匹敵する「問い」,「研究者としての（地域）貢献とは？」という「問い」を得，この「問い」

に対する答えを求めた期間だったのでしょうと，都合良く考えています.

本荘は雪降り始めましたか？

秋田，本荘を離れてみれば，住んでいた時には大変だった，その雪や風が懐かしく思い出されます. 愛知も寒くなってきましたが，雪は年に 1，2 回降るだけ，秋田のようには積もることないそうです.

雪の本荘で，またいつかお会いできることを楽しみに，皆様のご健勝を遠くよりお祈り申し上げます.

注

1. 国立研究開発法人科学技術振興機構「イノベーション創出を担う研究人材のためのキャリア支援ポータルサイト」．いわゆる，大学教員・研究者公募情報サイト．大学を含めた全国の研究機関の研究職の募集情報が閲覧できる．博士学位取得が見えてきた頃から行き先を探すのに利用したり，既に大学教員であっても他大学への異動を考えたりする場合に利用されている．ただし，募集情報が公開されていても，所謂「出来公募」もあるので注意が必要である.
2. 矢口高雄（秋田県 旧西成瀬村出身）による，釣りが三度の飯より大好きな少年三平三平（みひらさんぺい）が，様々な魚釣りに挑戦し，怪魚，大物を釣り上げる様を描いた釣り漫画.
3. イタリアのプロロードレーサー（自転車）.「スキンヘッドに顎ヒゲをたくわえた容貌や，レースに対する求道的とも言える姿勢から『海賊』，『走る哲学者』といった愛称で呼ばれた.」（Wikipedia）．1998 年ツール・ド・フランス個人総合優勝．ヒルクライムを得意とした．ドーピング疑惑によりレースから遠ざかる. 2004 年，イタリア リニミのホテルでコカインのオーバードースにより死亡しているのが発見される.
4. 泊まったホテルが秋田駅の東口だったので，朝，カーテンを開けた窓外に，「うぁ，ビルが無い！」，「県庁所在地で新幹線の駅なのに，住宅地と駅が近すぎないか？」という印象を受けた.
5. ご存知かもしれないが，「ガラパゴス島」という島はなく，ガラパゴスは 19 の島から成る「諸島」．ついでに言うと，正式名称はコロン諸島（Archipiélago de Colón），「コロンブスの群島」の意味だそう．本稿の「ガラパゴス」は「ガラパゴス化」のことであるが，これは，「孤立した環境（日本市場）で「最適化」が著しく進行すると，エリア外との互換性を失い孤立して取り残されるだけでなく，外部（外国）から適応性（汎用性）と生存能力（低価格）の高い種（製品・技術）が導入されると最終的に淘汰される危険に陥るという，進化論におけるガラパゴス諸島の生態系になぞらえた警句である.」（wikipedia）
6. 齋彌酒造（由利本荘市石脇）製造の日本酒.「本荘の酒だから」と言われ，初めて呑んだ時の印象は，「なんだ，これ甘いよ，甘すぎだよ，これ」そんなものだった．しかしながら，その後，「嫌いじゃないかな，雪の茅舎」となり，コンビニで手軽に買える 300ml のものは自宅でもよく呑んだ．愛知に来て最寄り駅の百貨店に置いてあるのを見つけた時は感動したが，近くの商店街に最近できた東北居酒屋の店先に「雪の茅舎」と書いてあるのを見た時はそれ以上に感動した．ちなみに，神戸でも売っていたので，日本全国に出荷しているものと思われる.

謝辞

筆者が秋田県立大学在職時に，議論させていただきました研究者の皆様をはじめ，お世話になりました教員，事務職員の皆様にあらためて感謝申し上げます.

（平成 29 年 11 月 30 日受付
平成 29 年 12 月 14 日受理）

Had I achieved the trip to the Himalayas?

Crying Out Earth Contributions, in the Center of the Galapagos Islands

Hayato Hosobuchi[1,2]

[1] *Department of Architecture and Environment Systems, Faculty of Systems Science and Technology, Akita Prefectural University*

[2] *Department of Architecture, Faculty of Engineering, Aichi Institute of Technology*

From April 1, 2010 through March 31, 2017, I worked as an assistant professor at Akita Prefectural University in research fields such as measurement and modeling of spectral solar radiation and ultraviolet solar radiation, and measurement and analysis of solar irradiance distribution. Moreover, in collaborations with companies, I worked on performance evaluation of new building wall material and study of thermal performance for improved methods of building wall units. During my residence in Akita, I have had the opportunity to discuss what sort of a work community contribution is appropriate for a young, earnest researcher. The trip to the Himalayas that I had dreamed of as a community contribution before I was employed at Akita Prefectural University has not occurred. However, I was able to experience precious discussions that made me think about community contributions, my research's significance, and the kind of figure that a researcher should represent. I really appreciate the great opportunity for discussions with young, earnest researchers in Akita.

Keywords: Akita, Akita Travel, Himalayas, Galapagos Islands, Community Contribution, Earth Contributions

Correspondence to: Hayato Hosobuchi, Department of Architecture, Faculty of Engineering, Aichi Institute of Technology, 1247 Yachigusa, Yakusa-Cho, Toyota City, Aichi Prefecture 470-0392, Japan. E-Mail: hhos@aitech.ac.jp